



大使の手紙

「アフリカの真珠」ウガンダから見た日本の支援

駐ウガンダ日本国特命全権大使 佐々山 拓也 氏



2024年3月にウガンダに赴任しました。英国研修後エジプトに赴任して以来のアフリカ勤務になります。

横浜でTICAD9が開催されました。ウガンダからは高齢のムセベニ大統領に代わりアルゴ副大統領を代表として閣僚3名を含む30名超の代表団が参加。ウガンダに関わるNGO、民間企業、JICA専門家などが数多くのイベントを実施しました。日本国内の関心を高めることにも大きな足跡を残すTICADとなったと思います。

在ウガンダ日本大使館は1997年にケニア兼轄から独立した比較的若い公館です。ウガンダが英国から独立したのが1962年です。ブッシュ・ウオーと呼ばれる80年代の内戦の時期を経て現在のムセベニ大統領が権力を掌握したのが1986年。現在の憲法は1996年に制定されました。ムセベニ大統領の元で国内政治は安定し日本も経済協力を拡大することができました。現在ウガンダには有償資金協力から無償資金協力、技術協力、国連機関を通じた支援、NGOとの連携、人間の安全保障・草の根無償資金援助、海外協力隊などODAのデパートとでもいうべき多様な手段を用いて援助を実施しています。ウガンダJICA事務所は海外協力隊員などを含め大使館の人員よりはるかに大きな規模です。

アフリカの援助ニーズは高度化・多様化してきておりウガンダも例外ではありません。筆者は貧困地域と言われる北部カラモジャ地方の地元政府の方の訪問を受けたことがあります。伝統的な貧困対策、教育や医療支援に加え若者のメンタルの悩みも大きな問題になっているとのこと。学校を出た後の将来を描くことができず精神的に不安定になる若者も多く出てきている、その支援も要請されました。日本社会が直面する課題がアフリカでも課題となっているのです。社会の変化の速度にも驚きました。高級マンションや事務所ビルの建築が至るところで進められています。この1年でも目に見えてその数が増えました。街を埋め尽くす日本の中古車も新車同様のものが目立ち始めました。街の看板も古ぼけたものが電子ボードに変わりました。

日本が活用できるツールは複雑化・高度化した支援ニーズにきめ細かく対応できるものだと思います。現在大使館、JICAで実施しているODA事業の多くは5年、10年前の先輩方が着想し決定したものが大宗を占めます。ウガンダの将来を洞察しタイムリーな支援となっているものが多く実施されているのはとてもありがたいことです。

発展のスピードがさらに加速しているのがウガンダの現状です。例えば、公共交通機関が未発達な中で市民の足はボタボタと呼ばれるインド製バイク、マタツと呼ばれる日本の中古マイクロバスの乗合タクシーが主です。カンパラ市内の道路を始めとするインフラ整備はJICAがかなりの部分を担ってきました。ただこれほどのバイク、タクシーの増加を予測することは難しかったと思います。

援助に振り向けるリソースの量が絞られているのは日本も例外ではありません。同時に、被援助国の問題も複雑化、高度化しておりその変化の速度も我々が想像する以上に早いことを実感しています。

1年半に満たないウガンダ生活ですが上記の考察から日本のODAが直面している課題は以下のようなものだと考えています。①ODA意思決定プロセスの迅速化と簡素化：現地の変化のスピードについていくことが重要。②長期間にわたり実施している案件は見直しを行う：経済社会の変化に合わせ不断に見直しを行っていく姿勢が重要。③JICA派遣専門家の知見の一層の活用：相手国政府にのみ助言を行うのではなく大使館などを通じて我が方にも知見を共有し我が国の政策にも役立てていく。限られたリソースを効率的に活用し、急速に変化するアフリカのニーズに今後も的確に答えていくことが日本の外交力の重みを増す意味からも不可欠であると考えています。



(写真は、建築中の高級マンション、バイク、日本車であふれるウガンダ市内の様子(※2025年4月撮影)。写真の化粧品店の看板は8月現在高級マンションの広告に置き換わっている。)